

だいやまいせき
台山遺跡 (No.29)

台字西ノ台 1418 番 10 地点

例 言

1. 本報告は、鎌倉市台字西ノ台1418番10において実施した台山遺跡（鎌倉市No.29）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は平成26年8月28日から同年10月10日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査の対象面積は、40.4㎡である。
3. 発掘調査体制は、以下のとおりである。
主任調査員 押木弘己（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
調査員 小野夏菜、吉田桂子（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
作業員 牛嶋道夫、鈴木啓之、三嶋義人、星 栄人、遠藤雅廣、鈴木敏文、大澤清春
（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）
整理作業参加者 押木弘己、遠藤綾子（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
4. 本報告の執筆と編集は、押木が行った。
5. 本報告で使用した写真は、現地・出土遺物とも押木が撮影した。
6. 現地調査ならびに本報告の作成に当たり、以下の諸氏からご教示を賜った。記して感謝したい。
栗原伸好・畠中俊明（公益財団法人かながわ考古学財団）、汐見一夫（鎌倉市教育委員会）
6. 本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は市教育委員会の統一基準に従って「D I 1 4 0 3」とし、出土品への注記などに使用した。

凡 例

1. 挿図の縮尺は、遺構・遺物ともに図中に表示している。
2. 本書中に記載した国土座標値は、世界測地系（第Ⅸ系：東日本大震災後の補正值）に基づいている。
3. 挿図に示した方位標は座標北（Y軸）で、真北はこれより0° 09' 25"ほど東に振れている。
4. 遺構挿図中の水系高は、海拔値を示す。
5. 遺物挿図中、断面を黒く塗りつぶしたものは須恵器であることを表す。

目 次 本 文 目 次

| | |
|-----------------------|-----|
| 第一章 遺跡の位置と歴史的環境 | 247 |
| 第1節 遺跡の立地 | |
| 第2節 周辺の調査成果 | |
| 第二章 調査の方法と経過 | 250 |
| 第1節 調査に至る経緯 | |
| 第2節 調査の方法 | |
| 第3節 調査の経過 | |
| 第三章 基本土層 | 252 |
| 第四章 発見された遺構と遺物 | 253 |
| 第五章 調査成果のまとめ | 260 |
| 付編 台山遺跡のテフラ | 261 |
| 1. はじめに | |
| 2. 試料と方法 | |
| 3. 結果と考察 | |

挿 図 目 次

| | | | |
|-------------------------|-----|---------------------|-----|
| 図1 台山遺跡における発掘調査地点 | 248 | 図5 竪穴2（住居）カマド | 255 |
| 図2 調査区配置図および遺構全体図 | 251 | 図6 出土遺物（1） | 256 |
| 図3 調査区壁セクション図 | 252 | 図7 出土遺物（2） | 258 |
| 図4 竪穴2（住居） | 254 | | |

表 目 次

| | | | |
|------------------|-----|--------------------|-----|
| 表1 出土遺物観察表 | 257 | 表2 出土遺物カウント表 | 259 |
|------------------|-----|--------------------|-----|

図版目次

| | | |
|------------------------------|-----|-----------------------------------|
| 図版 1 | 265 | 2. 同上 アップ (図 6 - 16) |
| 1. 調査開始前 (南から) | | 3. 同上 アップ (図 6 - 2) |
| 2. I 区 表土掘削状況 (北から) | | 4. II 区 竪穴 2 (北から) |
| 3. I 区 竪穴 2 (北から) | | 5. II 区 竪穴 2 掘り方 (北から) |
| 4. I 区 竪穴 2 竈 (北から) | | 6. II 区 竪穴 3 掘り方 (東から) |
| 5. I 区 竪穴 2 竈セクション (東から) | | 7. II 区 ローム層確認坑 (西から) |
| 6. I 区 遺構外 遺物出土状況 (図 6 - 35) | | 8. II 区 ローム層確認坑 最下層付近アップ (南から) |
| 7. I 区 遺構外 遺物出土状況 (図 6 - 36) | | |
| 8. I 区 最終全景 (北西から) | | 図版 3 竪穴 2・3 出遺物.....267 |
| 図版 2 | 266 | 図版 4 遺構・遺構外出土遺物.....268 |
| 1. II 区 竪穴 2 遺物出土状況 (南西から) | | |



東上空から調査地(○印)を望む
2015年2月9日撮影

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の立地

台山遺跡は鎌倉市北部に位置し、鎌倉街道（主要地方道 横浜鎌倉線）とJR横須賀線を北に見下ろす丘陵尾根の上部から裾部にかけて立地している。丘陵地形は多摩丘陵から三浦半島方面へ続くもので、鎌倉市北部の大部分を構成している。遺跡範囲は北西～南東に700 m、北東～南西には300 mの規模をもち、標高は18～74 mを測る。本地点は遺跡範囲のほぼ中央に位置し、JR北鎌倉駅から300 mほど西の丘陵上に所在する。微地形としては遺跡の南東端となる北鎌倉女子学園近辺が最も高位にあり、北西に向けた急勾配の下り斜面を経て光照寺の南で標高34 mほどの鞍部となる。本地点は、この鞍部から25 mほど北西にあり、現況での標高は36.5 mを測る。本地点が面する北西-南東方向の道路は尾根筋の中央を一直線に貫いているが、これは戦前に海軍将校の邸宅地を造成した際に通されたもので「海軍通り」との通称がある。この時の造成によって鞍部の北西側は大きく削平を受けたものと見られ、直線道路の両サイドには広い平坦面が続いている。本来は北西に向けて高まる地形が今少し続いていたのであろう。本地点以西の尾根上で発掘調査例が皆無なのは、戦前の造成によって遺跡が失われてしまったことに因るのではないだろうか。尾根の北裾部には明月谷から発した小袋谷川が西流し、現状で180 m幅の開析谷を形成している。現況の標高は15 m前後で推移する。南裾部にも120 m幅の谷が西に開口しており、その一部は遺跡範囲に内包されている。標高は、20～28 m前後である。

第2節 周辺の調査成果

台山遺跡では、これまでに16地点で発掘調査が実施されている（平成27年8月現在）。このうち、本調査は15地点目での調査例となる。

図1には、遺跡内の調査地点を実施した順に示した。未報告の地点もあって具体的な調査成果が不明なケースもあるが、幾例か代表的な成果について紹介する。地点1は昭和49年、三上次男氏によって学術調査として実施された。標高60 m弱の丘陵上で弥生後期・古墳後期・時期不明の竪穴住居が各1軒検出され、中世ではかわらけが出土したという。地点2・5・7は北鎌倉女子学園の校舎建設に伴い実施され、周辺の小字から「台山藤源治遺跡」と呼ばれている。この第1次調査（地点2）では縄文時代の陥とし穴1基や、弥生時代中期以降の竪穴住居18軒、古墳時代の竪穴住居13軒、平安時代の竪穴住居5軒が検出されている。中世では道路状遺構や14～16世紀の遺物が発見されている。第2次調査（地点5）でも縄文早期～前期の陥とし穴2基の他、弥生後期の竪穴住居1軒、奈良末～平安初期の竪穴住居1軒が検出されている。中世の遺構は確認されていないが、やはり14～16世紀の遺物が発見されている。第3次調査（地点7）では弥生後期後半～古墳時代の竪穴住居5軒、平安時代の竪穴住居1軒が検出され、中世では段切り造成面やピット列が確認されている。中世の遺物は、14～15世紀代の製品が中心となる。

この他、地点3・4では弥生後期を中心とする竪穴住居8軒が確認されており、地点8では中世後期の南北溝2条が確認されている。地点9では弥生時代後期の竪穴住居4軒、古墳時代の竪穴住居2軒と掘立柱建物1棟、古墳後期末～奈良時代前半の竪穴住居2軒が発見されている。古代以前の掘立柱建物や奈良時代の竪穴住居は、台山遺跡では初めての確認例となった。地点10は丘陵斜面に立地するため遺構・遺物とも少なかったが、弥生後期～古墳前期のピット2基が検出され、弥生中期後葉の宮ノ台式壺形土器が出土している。地点11と14・16は同じ雛壇状の造成面に立地しており、地点16では中世段階で丘陵斜面の岩盤を削って平場を造成している状況が確認されている。その後も削平面上に整地層を重ねて

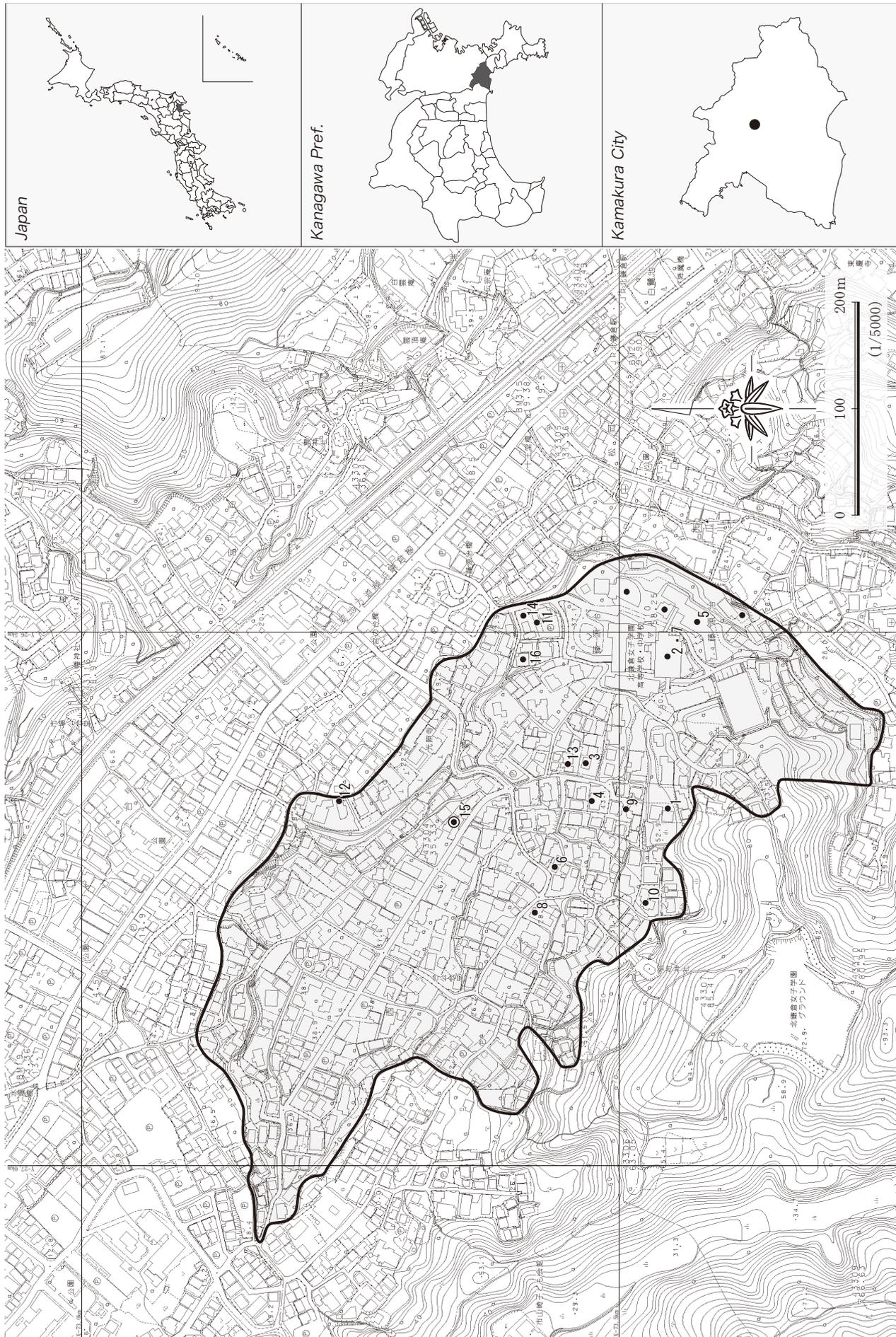


図1 台山遺跡における発掘調査地点

利用されており、丘陵裾に沿って排水目的であろう溝が開削されていた。出土かわらけの様相から造成の開始期は14世紀前半まで遡る可能性があるが、土地利用の中心は14世紀末～15世紀代であったと考えられる。地点12も丘陵の斜面中腹に立地し、雛壇状の平地において中世の遺構面3枚が確認されている。遺構は土坑とピットが中心で、一部のピットは並ぶ可能性がある。遺物の様相から、15世紀代の中葉～後半を中心に土地利用がなされていたと考えられる。

以上を整理すると、台山遺跡では丘陵上を中心に広範囲にわたって弥生時代～平安時代の竪穴住居が分布しており、各時代の集落展開が把握されていることになる。集落の開始時期は弥生時代中期後葉の宮ノ台式期となろうが、この段階では発見されている住居の数も少なく、現時点の調査成果では大規模集落の存在は想定できない。弥生後期の久ヶ原式～弥生町式期に住居軒数が増加し、古墳時代前期まで一定規模の集落が継続するようである。古墳中期には地点5・7で竪穴住居が3軒、地点9で土坑1基が発見されており、他地域の例に漏れず退潮には入るものの完全には途絶しないようである。古墳後期になると再び住居軒数は増加に転じ、後期末～奈良時代前半に継続する状況も窺える。続く平安時代に入っても、一定規模の集落が存続するようである。以上は大まかな時期区分に基づく記述であるため、報告された各遺構の帰属時期を詳細に把握することで集落変遷の実相が明らかになってこよう。

また、縄文時代の発見遺構は今のところ陥とし穴に限られているが、早期～前期と比較的古い時期の遺構も含まれていることから、鎌倉周辺の縄文社会の形成過程を考える上で貴重な成果といえる。

中世においては14世紀後半～15世紀代に土地利用が進んだことが明らかとなりつつあり、弘安五年(1282)の円覚寺創建に伴う土地開発は、本遺跡付近までは及ばなかったことが推測できる。本地点の北東に近い西台山英月院光照寺は時宗寺院で、藤沢市清浄光寺(遊行寺)の末である。境内に建武二年(1336)銘をもつ安山岩製板碑が現存することから14世紀前半に寺域の整備が進んだ可能性はあるが、この段階では周辺の広い範囲にまで開発が及ばなかった様子が、遺跡内容からは窺い知れる。

【図1に示した調査地点の報告書】

1. 丑野 毅 1974 「神奈川県鎌倉市台遺跡調査報告書」『人文学科紀要』第59輯 東京大学教養学部人文科学科
2. 手塚直樹他 1985 『台山藤源治遺跡』台山遺跡発掘調査団
3. 齋木秀雄・宗臺秀明 1985 「3. 台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1』鎌倉市教育委員会
4. 玉林美男他 1988 「6. 台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4』鎌倉市教育委員会
5. 大河内 勉 1996 『台山藤源治遺跡 第2次調査報告』台山遺跡発掘調査団
6. 大上周三 1992 「4. 台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8』鎌倉市教育委員会
7. 宗臺秀明 1993 『台山藤源治遺跡—第3次調査報告—』台山藤源治遺跡発掘調査団
8. 野本賢二 1997 「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13(第1分冊)』鎌倉市教育委員会
9. 若松美智子 1998 『台山遺跡発掘調査報告書—西ノ台1733-1外地点—』台山遺跡埋蔵文化財発掘調査団
・東国歴史考古学研究所
1999 「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
10. 継 実 2001 「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
11. 森 孝子 2002 『台山遺跡発掘調査報告書』有限会社博通
12. 伊丹まどか 2004 「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20(第2分冊)』鎌倉市教育委員会
13. 2007年度調査・未報告
14. 2009年度調査・未報告
15. 2014年度調査・本報告
16. 2015年度調査・未報告

【参考文献】

- 鎌倉市史編纂委員会編 1959 『鎌倉市史 社寺編』鎌倉市
白井永二編 1976 『鎌倉事典』東京堂出版

第二章 調査の方法と経過

第1節 調査に至る経緯

今回の調査は個人専用住宅の建設に伴う埋蔵文化財の記録保存調査として鎌倉市教育委員会（以下、市教委）が実施した。

建築計画では基礎工事として深さ10mの杭を打設することから、市教委では平成26年4月16日と17日の二日間にわたって埋蔵文化財の確認調査を実施した。この結果、地表下60cmで古墳時代の遺物包含層が検出され、地表下80cmの関東ローム層上では3基の遺構が確認されたことから、建築工事の実施に先立って本格的な発掘調査を実施する必要があるとの判断に至った。

現地調査は平成26年8月28日～10月10日の約1か月半をかけて実施した。次節で述べる拡張区も含め、最終的な調査面積は40.4㎡となった。

第2節 調査の方法

調査区は、掘削に伴う残土置き場を確保する必要から北半部のⅠ区と南半部のⅡ区とに分割し、Ⅰ区からⅡ区の順に調査を進めた。Ⅰ区の南部からⅡ区のほぼ全域で古墳時代後期の竪穴住居が検出され、さらにⅡ区の南西外にも同遺構が続くことが確認された。この部分では表土下15cmで遺構の確認面に達するが、建築計画ではカーポートの基礎工事が確認面付近にまで及ぶ可能性があったことから、施工対象となる約4㎡の範囲について調査区を拡張して遺構プランの確認を行った(図2)。

表土掘削はⅠ・Ⅱ区とも重機によって行い、拡張区については人力で行った。遺物包含層以下は全て人力によって掘削し、順次遺構の確認と掘削、次いで写真撮影・測量図作成といった記録作業を進めた。

測量に当たっては国家座標値を載せた基準杭を敷地内に設定し、主に光波測距儀で測定した座標値を方眼紙にプロットする方法で平面図を作成した。国家座標の移設は、市道上に設置された都市再生街区多角点「10B49」と同補助点「4A529」の二点間関係をもとに開放トラバース法によって行った。標高については、多角点「10B50」(33.374 m)を起点に直接水準測量を繰り返して敷地内の測量杭に移設した。これら測量の基準とした各多角点および補助点の国家座標値は、平成23年3月11日に発生した東日本大震災後の補正值である。

第3節 調査の経過

前述のとおり、調査はⅠ区からⅡ区の順に進めた。Ⅰ区の表土掘削は平成26年8月27日に実施し、翌28日に調査用具を搬入して本格的に調査に着手した。遺構の確認と掘削、図面作成および写真撮影といった記録作業を進め、9月16日にはⅠ区の調査を終了して9月17日にⅡ区の表土掘削を行った。Ⅱ区と拡張区についてもⅠ区と同様に掘削と記録作業を進め、古墳時代の遺構調査を10月2日に終了した。この後は関東ローム層以下の確認坑を掘削して旧石器時代の調査を試みた。以上を経て、10月10日には調査用具を撤収して現地での調査工程を全て終了した。

出土品等の整理および本報告の作成は平成26年度後半から27年度前半にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課分室において断続的に行った。

第四章 発見された遺構と遺物

今回の調査ではローム層上面で3基の竪穴遺構と10基ほどのピットが検出された。竪穴遺構のうち1基はカマドなど付帯施設の存在から、住居であることが把握できた(竪穴2)。この北側でも貼り床状の硬化面が確認され、住居としての可能性も考えられるが、その他の施設痕跡が発見できなかったことから竪穴には含まなかった。ピットのうち何基かは敷地境界線に沿うように並ぶ様子も窺えたが、間隔が一定でなく、覆土様相も区々であったことから柱穴列とは判断しなかった。

以下、主な検出遺構と出土遺物について説明する。

竪穴2(住居)

I区の南部からII区のほぼ全域にかけて検出された。方形基調の平面形を呈するが、調査範囲内では何れのコーナーも確認できなかった。北と西の壁面が検出され、両壁際で壁周溝を確認している。北壁には灰色粘土で構築されたカマドが付くが、大部分が調査区外に位置するため、焚き口や煙道など内部の調査は行えなかった。貼り床の上面は硬化しており、カマド前面の硬化が最も顕著であったと考えられる。床面上では西壁に沿って2本の支柱穴が確認でき、柱穴と周溝の造り替え状況から、少なくとも1回は西壁の拡張を伴う建て替えが行われたことが推測できる。カマドを前方に見た場合の主軸方位はN10°Wを指す。

南と東が調査範囲外に続くため全体の規模は不明であるが、カマドや柱穴の位置を基準に反転復元を試みると東西9m×南北6mの長方形プランに復元できる。6×6mの正方形プランでカマドが北壁の東寄りに位置していた可能性も想定できよう。確認面から20～25cmの深さで床面に達し、床面標高は35.55～35.6m前後で推移する。支柱穴は建て替え後のもので床面から80～90cmの深さを持ち、底面では柱当たりと思しき直径15cmほどの硬化面が遺存していた。柱間距離は290cmを測る。建て替え前の柱穴は僅かに浅く底面標高が34.9～35.0mを測り、柱間距離は270～280cm前後であったと考えられる。床下から掘り方底面までは5～15cmを測り、竪穴の中央部よりも壁際の方が深かった。

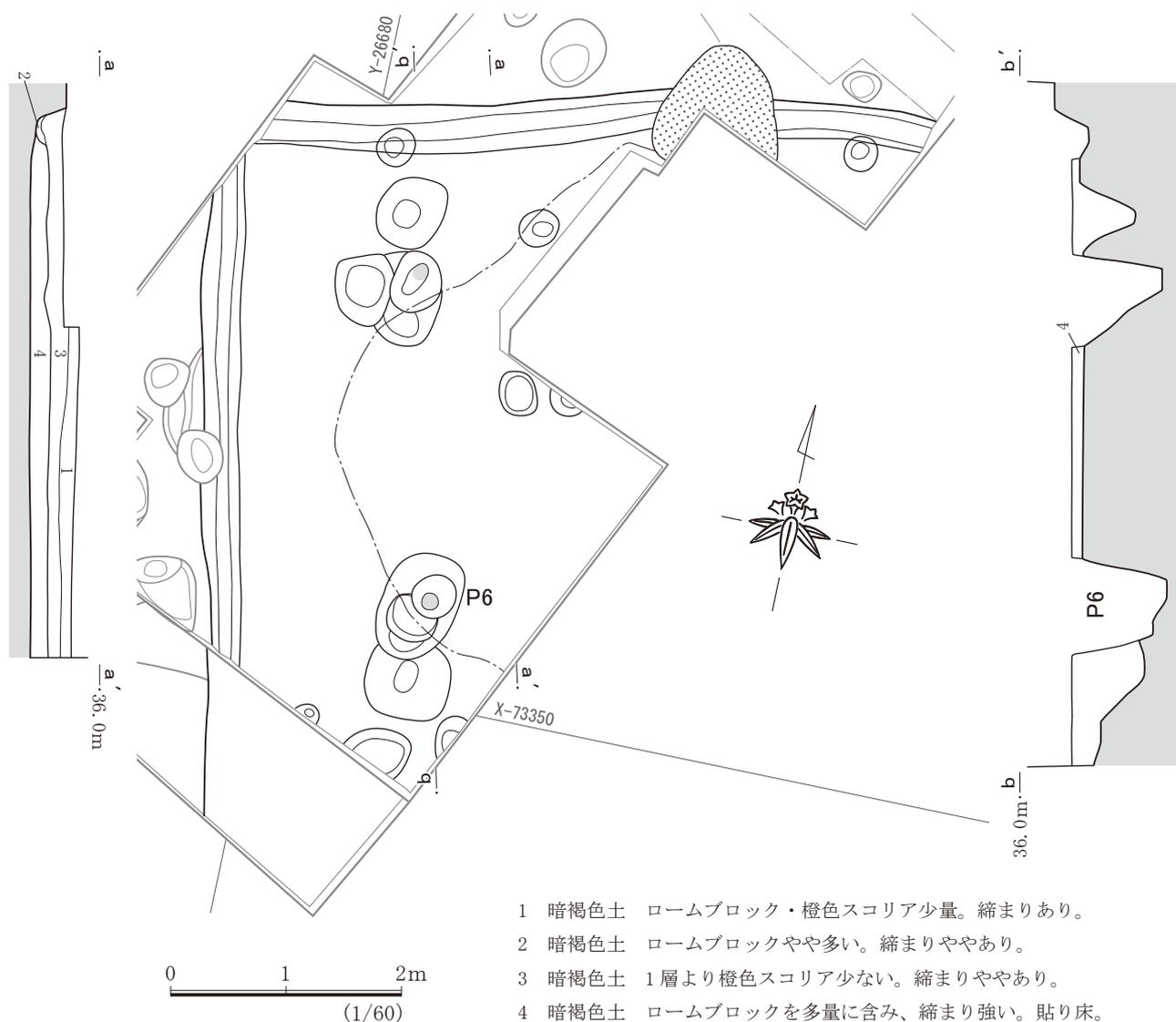
竪穴2の出土遺物は、図6-1～24に示した。覆土からの出土遺物が殆どであり、床面での使用状態を残す資料は皆無であった。カマドの周辺では崩落粘土中より土師器甕などの遺物が出土しているが、燃烧部の掘削に及んでいないことからカマドでの使用を明確に把握し得る遺物はなかった。個々の遺物についての詳細は、表1を参照されたい。

先述の出土状況に加えて完形品も全くないことから年代の指標としては物足りないが、16の東海産須恵器坏身は復元最大径が10.6cmと小振りで蓋受けの返りも短小化しているので、この種の資料(坏H)としては比較的新しい7世紀第3四半期頃の所産と考えられる。加えて10～12・15の土師器甕は古墳時代後期のケズリ甕よりも後出的である相模型甕に含め得るので、7世紀後葉～末の所産と判断できる。土師器坏の様相も含め、本遺構は7世紀後葉には廃絶して埋没過程に入っていたことが推測できる。

竪穴3(住居?)

II区の西壁際で検出された、西へ向けての落ち込みである。東側は竪穴2に切られていることから、東西1m、南北1.5m程度の範囲を確認できたに過ぎない。落ち込みの形状や覆土様相は竪穴2に類似するが、検出できた部分のみでは遺構の具体的な様相は不明である。確認面からは20cmほどの深さを持ち、底面標高は35.6m前後で推移する。

本遺構の出土遺物は図6-25～30に示した。小片ばかりであるため具体的な年代観を見出すのは難しいが、7世紀前半～中頃の資料が最も新しいものと考えられる。30の高坏脚部は、古墳前期の所産か。



- 1 暗褐色土 ロームブロック・橙色スコリア少量。締まりあり。
- 2 暗褐色土 ロームブロックやや多い。締まりややあり。
- 3 暗褐色土 1層より橙色スコリア少ない。締まりややあり。
- 4 暗褐色土 ロームブロックを多量に含み、締まり強い。貼り床。

図4 竪穴2 (住居)

竪穴1 (地割れ?)

I区の北西隅で検出された、北に向けての落ち込みである。南北160cmほどが確認できたものの遺構の大部分が調査区外に続くため全体の形状や規模は不明である。確認面から25cmの深さ、標高35.4mまで掘り下げたが底面には達せず、下位に進むほど覆土が軟質なローム土に変移する様子が見て取れたことから、人為による遺構ではなく、地割れなど自然要因の落ち込みであると判断した。この位置から北に20mほど向かうと斜面地となることから、地震や降雨の際には小規模な地割れが生じ易い土地であったことが推察できる。上位の覆土には、硬化土のブロックが混入する。

本遺構の出土遺物は図6-31に示した。器形・調整から古墳時代前期の小型高坏脚部と見られる。

硬化面

I区の南部、竪穴2の北側に位置する。南側は竪穴2に切れ、西側は調査区外に続く。東西2.9m、南北2.8mの広がりを確認した。硬化面上の標高は35.7m前後で推移し、層厚10～25cmの暗褐色土で構成される(図3-11層)。全体に締まりの強い土層だが、上面の硬化が顕著であった。断面観察では竪穴1(地割れ?)で北部が切られていることを確認した。竪穴の覆土上位に混入した硬化土ブロックは、本硬化面の構成土が崩れたものと考えられる。

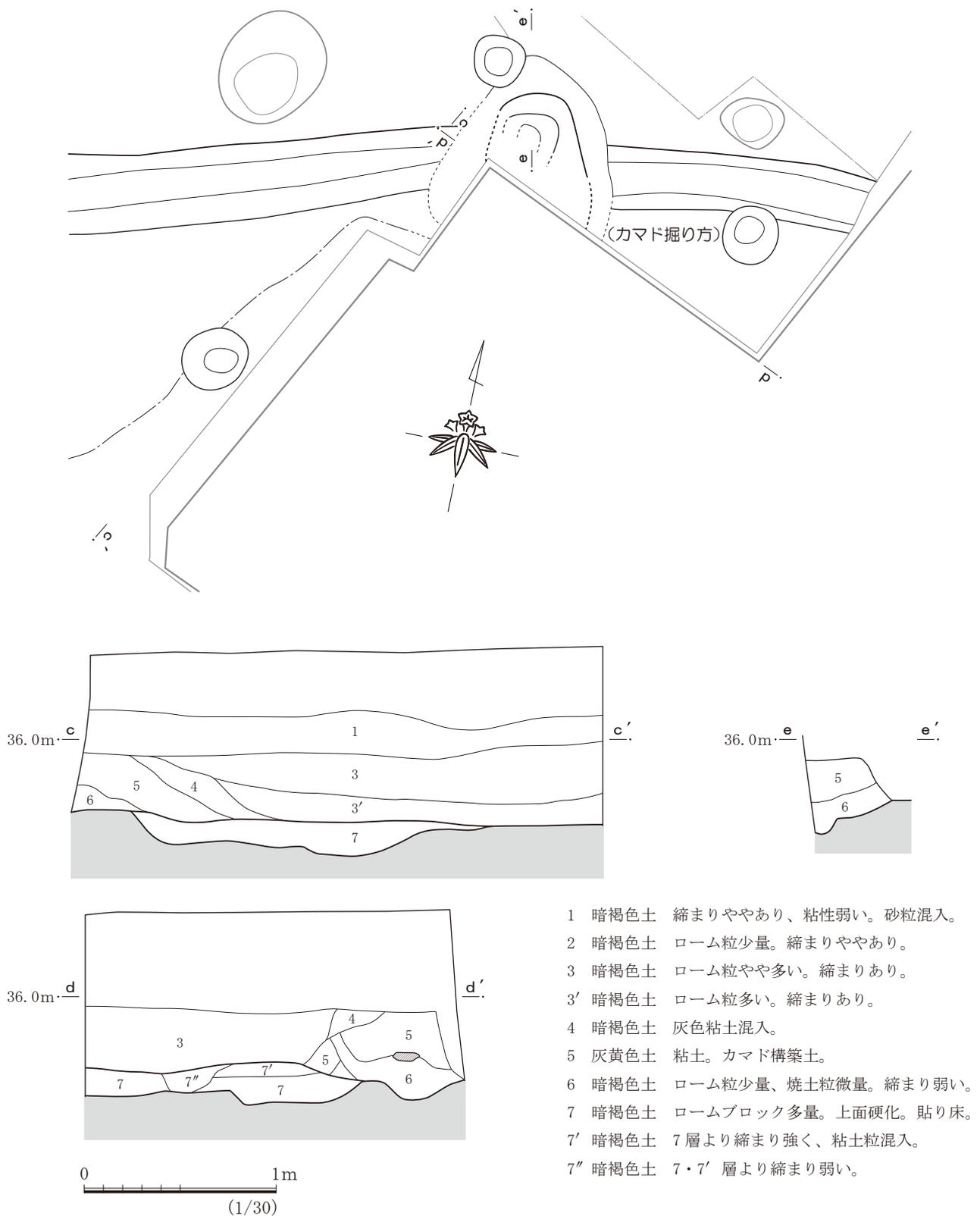


図5 竪穴2 (住居) カマド

本遺構については竪穴住居の貼り床と考えるのが最も理解しやすいが、調査範囲の少なさや遺構間の重複が著しいことも相俟ってカマドや壁周溝・柱穴など付帯施設の痕跡は確認できなかった。

硬化面上部では図6-36に示した土師器高坏の脚部が出土している。帰属関係が曖昧なため、遺構外の出土資料として提示した。

土坑・ピット

土坑・ピットは遺物が出土したもののみ番号を付した。I区で検出されたP1は他の遺構よりも覆土が軟質で底面に向けて先細りになることから、比較的新しい痕跡(山芋の採取穴など)と考えた。この他の遺構については堅穴2などと近似した覆土様相と認識できたことから、古墳時代～古代の所産と推測している。数基のピットは直線上、または直行方向に並ぶようにも見て取れるが、調査範囲が狭いこともあって等間隔で並ぶ確実な柱穴列は抽出できなかった。遺構個々の特徴については説明を省くので、図3を参照されたい。

土坑・ピットの出土遺物は図6-32～34に示した。32は古墳時代前期のS字状口縁台付甕の口縁部片。35は内外面に黒色処理を施す駿東系の土師器坏で、7世紀代の所産と見られる。

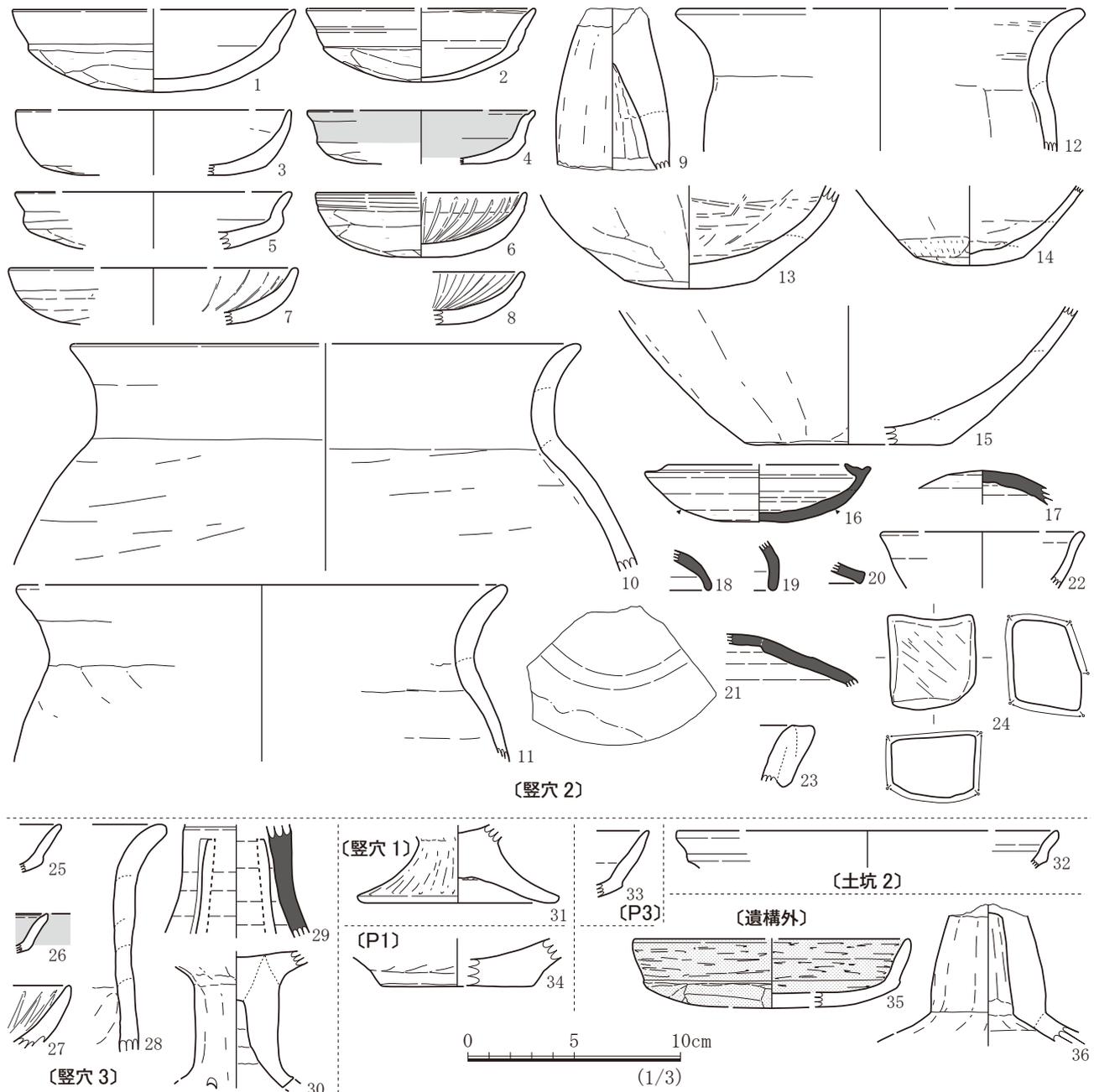


図6 出土遺物(1)

表1 出土遺物観察表

| 遺物番号 | 種別 | 器種 | 法量 (cm) | | | その他の特徴 |
|--------------|--------|------|-----------|--------|--------|--|
| | | | 口径 | 底径 | 器高 | |
| 出土遺物 (1)(図6) | | | | | | |
| 1 | 土師器 | 坏 | (13.2) | — | 4.0 | 1/3 胎土:微砂質。赤色礫、白色針状物質 色調:淡橙褐色 |
| 2 | 土師器 | 坏 | (10.6) | — | 3.5 | 1/3 胎土:小礫、角閃石 色調:淡橙色 |
| 3 | 土師器 | 坏 | (12.8) | (10.5) | 3.1 | 1/8 胎土:細砂質 色調:橙色 |
| 4 | 土師器 | 坏 | (10.6) | — | 2.6 | 1/8 胎土:白色小礫 色調:赤褐色 口縁部外面～内面全体を赤彩比企型 |
| 5 | 土師器 | 坏 | (12.8) | — | [2.7] | 口1/6 胎土:角閃石 色調:橙褐色 |
| 6 | 土師器 | 坏 | (9.7) | — | 3.1 | 1/4 胎土:微砂質。褐色スコリア 色調:橙褐色 内面:放射状暗文 |
| 7 | 土師器 | 坏 | (12.4) | — | [2.7] | 口1/6 胎土:緻密。微砂質。白色針状物質 色調:橙褐色～黒褐色 内面放射状暗文 |
| 8 | 土師器 | 坏 | — | — | [2.5] | 口1/6 胎土:細砂質。角閃石 色調:橙褐色 内面放射状暗文 |
| 9 | 土師器 | 高坏 | — | — | [7.7] | 脚のみ(端部欠) 胎土:緻密。角閃石 色調:橙褐色～黒褐色 外面ナデ |
| 10 | 土師器 | 甕 | (23.8) | — | [10.8] | 口～胴上1/4 胎土:緻密。微砂質。白色針状物質、褐色スコリア 色調:橙色 |
| 11 | 土師器 | 甕 | (22.6) | — | [8.4] | 口1/6 胎土:細砂質。雲母微粒 色調:橙褐色 |
| 12 | 土師器 | 甕 | (18.9) | — | [6.8] | 口1/6 胎土:細砂質。泥岩粒、角閃石 色調:橙褐色 胴部外面～口縁部内面黒変 |
| 13 | 土師器 | 甕 | — | (6.2) | [5.0] | 底のみ 胎土:細砂質。角閃石 色調:橙褐色 内外面弱いヘラミガキ |
| 14 | 土師器 | 甕 | — | 5.2 | [3.8] | 底完存 胎土:微砂質。緻密 色調:橙褐色～黒褐色 内底面に煤付着 |
| 15 | 土師器 | 甕 | — | (9.6) | [6.6] | 底1/3 胎土:微砂質。白色針状物質 色調:橙褐色 |
| 16 | 須恵器 | 坏 | 最大径(10.6) | — | 2.7 | 1/2弱 胎土:緻密 色調:淡灰黄色 底部外面回転ヘラケズリ 湖西産 合子状坏身(坏H) |
| 17 | 須恵器 | 坏蓋 | — | — | [1.6] | 天井周辺 胎土:緻密。白色砂粒 色調:灰色 |
| 18 | 須恵器 | 坏蓋 | — | — | [1.9] | 口小片 胎土:緻密。白色砂粒 色調:灰色 |
| 19 | 須恵器 | 坏蓋 | — | — | [2.3] | 口小片 胎土:緻密。白色粗砂 色調:灰色 |
| 20 | 須恵器 | 坏蓋 | — | — | [1.0] | 口小片 胎土:緻密。小礫 色調:灰色 |
| 21 | 須恵器 | 瓶 | — | — | — | 胴小片 胎土:やや砂質。黒色微粒 色調:灰色 外面に緑灰色の自然釉 湖西窯産 フラスコ瓶or平瓶 |
| 22 | ロクロ土師器 | 坏 | (9.4) | — | [2.7] | 口1/8 胎土:微砂質。白色針状物質、角閃石 色調:橙褐色 |
| 23 | 土師器 | 壺or甕 | — | — | [3.0] | 口小片 胎土:粗砂粒 色調:にぶい橙褐色 折り返し口縁か |
| 24 | 石製品 | 砥石 | 長さ4.5 | 幅4.0 | 厚さ3.2 | 完形か 86g 4面を使用 |
| 25 | 土師器 | 坏 | — | — | — | 口小片 胎土:微砂質 色調:橙褐色 |
| 26 | 土師器 | 坏 | — | — | — | 口小片 胎土:白色微砂粒 色調:赤褐色 口縁部外面～内面赤彩 |
| 27 | 土師器 | 壺? | — | — | [3.0] | 口小片 胎土:角閃石 色調:橙褐色 内面粗いタテヘラミガキ(放射状) |
| 28 | 土師器 | 甕? | — | — | [10.8] | 口～胴上小片 胎土:小礫、角閃石 色調:にぶい褐色～黒褐色 内外面黒変胴部外面ナデ |
| 29 | 須恵器 | 高坏 | — | — | [5.4] | 脚1/4(端部欠) 胎土:緻密。石英粒、白色礫 色調:灰色ヘラ切りによる長方形スリット |
| 30 | 土器 | 高坏 | — | — | [6.5] | 脚のみ(端部欠) 胎土:粗砂、角閃石。 色調:橙褐色 円形の透孔1ヶ所 |
| 31 | 土師器 | 高坏 | — | (9.5) | [3.7] | 脚1/3 胎土:粗砂、角閃石 色調:にぶい褐色～赤褐色 外面赤彩 |
| 32 | 土器 | 甕 | (17.8) | — | [1.8] | 口1/8 胎土:粗砂粒、雲母粒 色調:赤褐色 S字状口縁(台付甕) |
| 33 | 土師器 | 坏 | — | — | — | 口小片 胎土:緻密。微砂粒 色調:橙色 |
| 34 | 土師器 | 甕 | — | (7.2) | [2.3] | 底1/2弱 胎土:粗砂粒 色調:褐色 外面:煤付着 |
| 35 | 土師器 | 坏 | (12.8) | — | 3.3 | 1/2弱 胎土:橙褐色。微砂質。白色微砂、角閃石 色調:黒色 駿東系 |
| 36 | 土師器 | 高坏 | — | — | [6.7] | 脚のみ(端部欠) 胎土:緻密。白色針状物質、角閃石 色調:橙褐色 |
| 37 | 土器 | 壺 | — | — | — | 胴小片 胎土:細砂質。角閃石、石英粒 色調:橙褐色胴部外面単節RL縄文+S字状結節文3段 文様帯以外は赤彩?+ヘラミガキ |

| 遺物番号 | 種別 | 器種 | 法量 (cm) | | | その他の特徴 |
|---------------|------------|---------------|-------------|------------|-------------------|---|
| | | | 口径 | 底径 | 器高 | |
| 出土遺物 (2) (図7) | | | | | | |
| 38 | 土器 | 壺 | — | — | — | 胴小片 胎土:細砂質。角閃石 色調:褐色～黒褐色 胴部外面鋸歯状沈線区画内に単節LR縄文充填 文様帯以外はナナメハケ→ヘラミガキ |
| 39 | 土師器 | 坏 | (13.4) | — | (3.1) | 1/4弱 胎土:淡褐色。緻密。混入物殆どなし 色調:黒褐色 |
| 40 | 土器 | 甕 | (17.3) | — | [4.5] | 口1/8弱 胎土:白色針状物質、角閃石 色調:橙褐色 |
| 41 | 土師器 | 甕? | — | — | [6.4] | 口小片 胎土:緻密。白色針状物質、角閃石 色調 橙色 胴部外面タテヘラケズリ |
| 42 | 土師器 | 甕 | — | — | [5.9] | 口小片 胎土:微砂質。緻密 色調:褐灰色/黒色 内面黒色処理+ ヨコヘラミガキ 胴部外面ナナメヘラケズリ |
| 43 | 土師器 | 甕? | — | — | [5.0] | 口小片 胎土:細砂質。角閃石 色調:赤褐色 胴部内面黒変 |
| 44 | 土器 | ロクロ かわらけ・大 | — | — | 3.1 | 1/8以下 胎土:微砂質。角閃石 色調:淡橙色 |
| 45 | 石製品 | 砥石 | 長さ 3.4 | 幅 [3.2] | 厚さ 2.0 | 残存率不明 表面1面を使用 白色・緻密 |
| 46 | 土器 | 壺 | — | — | — | 胴小片 胴部外面に櫛描きのコンパス文と横線文 山中式系・在地産 |
| 47 | 土器 | 高坏 | — | — | [3.5] | 脚のみ(端部欠) 胎土:粗砂粒、角閃石 色調:橙褐色 |
| 48 | 土師器 | 埴 | (13.4) | — | [6.0] | 1/3 胎土:白色砂粒 色調:赤褐色～黒褐色 口縁部外面～内面全体に赤彩 体部外面黒変 |
| 49 | 土師器 | 坏 | — | — | — | 口小片 胎土:白色微砂 色調:褐色～赤褐色 口縁部外面～内面に赤彩 |
| 50 | 陶器 | 縁釉皿 | — | — | [1.9] | 口小片 胎土:灰黄色。やや粗 釉調:黒褐色 |
| 51 | ロクロ 土師器 | 坏 | (11.4) | — | [2.5] | 口1/6 胎土:白色針状物質 色調:橙褐色 |
| 52 | 土師器 | 甕 | — | (7.0) | [3.2] | 底1/3 胎土:白色針状物質 色調:褐色 |
| 53 | 土製品 | 用途不明 | 長さ [3.9] | 直径 2.4 | 孔径 0.1～ 0.7 | 残存率不明 胎土:粗砂粒 色調:淡黄褐色 |
| 54 | 石製品 | 砥石 | 長さ [3.7] | 2.2 | 1.5 | 残存率不明 |

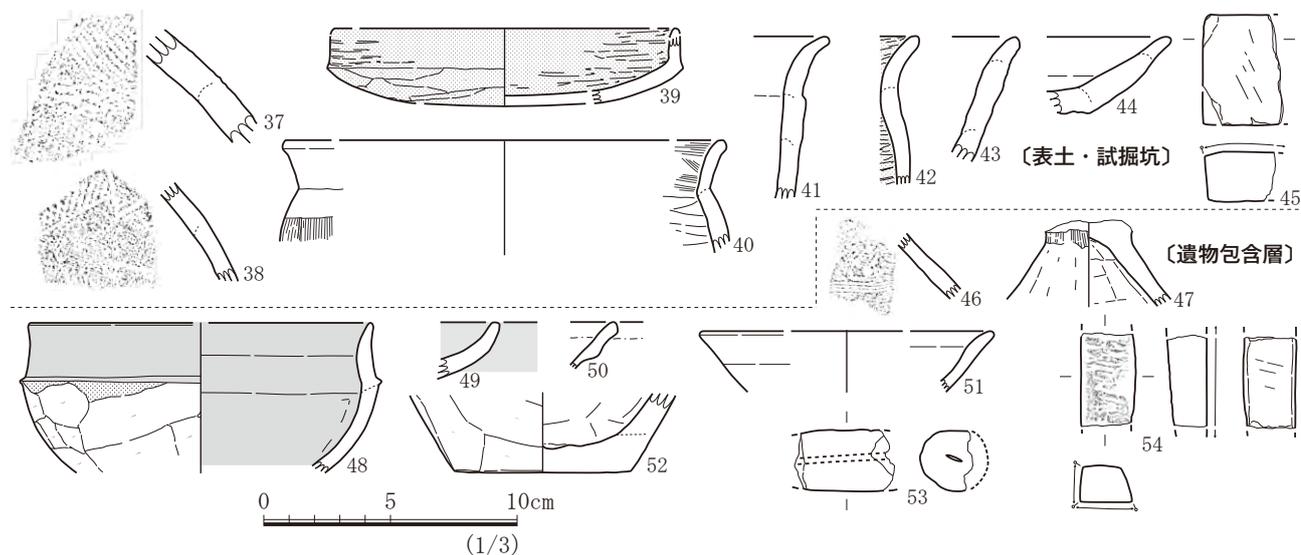


図7 出土遺物(2)

その他の出土遺物

図6-35～図7-54には遺構以外で出土した遺物を掲げた。古墳時代後期の遺物が中心となるが、弥生後期の壺形土器(37・38・46)や平安時代のロクロ土師器(51)、中世後期のかわらけ・陶器(44・50)などがごく少量ながら含まれており、希薄ながら各時代における土地利用の跡を窺うことができる。

表2 出土遺物カウント表

| 地区 | 面・層位 | 遺構 | 層位 | 土師器 | | | | | 須恵器 | | | | | ロクロ土師器 坏 | 弥生土器 or 古式土師器 | | | |
|-----|------|--------|-----|-----|----|-----|----|----|-----|----|----|---|---|-------------|------------------|---|---|----|
| | | | | 坏 | 高坏 | 甕 | 甑 | 小片 | 坏身 | 坏蓋 | 高坏 | 瓶 | 甕 | | 壺 | 甕 | 鉢 | 高坏 |
| — | — | 表採 | — | 30 | 1 | 68 | | | | | 1 | | | | 20 | 1 | | |
| I | — | 試掘時 | — | 4 | | 20 | 20 | | | | | | | | 9 | 3 | 1 | |
| I 拡 | 表土 | — | — | 1 | | 12 | | | | | | 1 | | | 4 | | | |
| I | 包含層 | — | — | 23 | | 104 | 2 | | | 1 | | | 1 | | 16 | | | |
| I | 1面 | — | — | 3 | 1 | 29 | | | | | | | | | 2 | | | |
| II | 包含層 | — | — | 25 | 1 | 198 | | | | 4 | | 3 | 2 | 1 | 21 | | | 2 |
| II | 表土 | — | — | 8 | | 27 | | | 14 | | | 1 | 4 | | 3 | 1 | | |
| II | TP上層 | — | — | | | | | 1 | | | | | | | | | | |
| II | 1面 | — | — | 1 | | 1 | | | | | | | | | | | | |
| I | 1面 | 竪穴1 | 覆土 | | 1 | 2 | | | | | | | | | | | | |
| I | 1面 | 竪穴2 | 覆土 | 8 | | 18 | 50 | | 1 | | | | | | 12 | 4 | | |
| II | 1面 | 竪穴2 | 覆土 | 70 | 2 | 396 | 44 | 1 | | 6 | 1 | 2 | | 4 | 36 | 9 | | 3 |
| I | 1面 | 竪穴2カマド | — | 5 | | 15 | | | | | | | | | | | | |
| I | 1面 | 竪穴2 | 掘り方 | 4 | | 7 | | | | | | | 1 | | | | | |
| I | 1面 | 竪穴3 | 覆土 | 13 | | 30 | | | | | | | | | | 1 | | |
| II | 1面 | 竪穴3 | 掘り方 | 1 | | 13 | | | 1 | | | 1 | | | 1 | | | 1 |
| II | 1面 | 土坑1 | 覆土 | 1 | | 17 | | | | | | | | | 2 | | | 1 |
| II | 1面 | 土坑2 | 覆土 | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | | |
| I | 1面 | ピット1 | 覆土 | | | 3 | | | | | | | | | | | | |
| I | 1面 | ピット2 | 覆土 | | | 2 | | | | | | | | | | | | |
| I | 1面 | ピット3 | 覆土 | 1 | | 7 | | | | | | | | | | | | |
| II | 1面 | ピット5 | 覆土 | 1 | | | | | | | | | | | | | | |
| II | 1面 | ピット6 | 覆土 | | | 1 | | | | | | | | | | | | |

| 地区 | 面・層位 | 遺構 | 層位 | 縄文土器 | | ロクロ かわらけ 大・小 | 瀬戸 | | | 常滑 | 土製品 土錘 | 石製品 砥石 | 鉄 鉄滓 | 人骨 ? 焼骨 |
|-----|------|--------|-----|------|---|--------------------|-----|------|---|----|-----------|-----------|---------|------------|
| | | | | 深鉢 | 鉢 | | 仏華瓶 | 縁袖小皿 | 鉢 | | | | | |
| — | — | 表採 | — | | | 7 | 1 | | 1 | | | 1 | 1 | 1 |
| I | — | 試掘時 | — | | | 1 | | | | | | | | |
| I 拡 | 表土 | — | — | | | 3 | | | | | | | | |
| I | 包含層 | — | — | | | | | | | | 1 | | | |
| I | 1面 | — | — | | | | | | | | | | | |
| II | 包含層 | — | — | 1 | | 10 | 1 | 1 | | 2 | | 1 | 1 | 1 |
| II | 表土 | — | — | | | 16 | | 1 | | 1 | | | | |
| II | TP上層 | — | — | | | | | | | | | | | |
| II | 1面 | — | — | | | | | | | | | | | |
| I | 1面 | 竪穴1 | 覆土 | | | | | | | | | | | |
| I | 1面 | 竪穴2 | 覆土 | | | | | | | | | 1 | 1 | 1 |
| II | 1面 | 竪穴2 | 覆土 | | | | | | | | | | | |
| I | 1面 | 竪穴2カマド | — | | | | | | | | | | | |
| I | 1面 | 竪穴2 | 掘り方 | | | | | | | | | | | |
| I | 1面 | 竪穴3 | 覆土 | | | | | | | | | | | |
| II | 1面 | 竪穴3 | 掘り方 | | | | | | | | | | | |
| II | 1面 | 土坑1 | 覆土 | | | | | | | | | | | 1 |
| II | 1面 | 土坑2 | 覆土 | | | | | | | | | | | |
| I | 1面 | ピット1 | 覆土 | | | | | | | | | | | |
| I | 1面 | ピット2 | 覆土 | | | | | | | | | | 1 | |
| I | 1面 | ピット3 | 覆土 | | | | | | | | | | | |
| II | 1面 | ピット5 | 覆土 | | | | | | | | | | | |
| II | 1面 | ピット6 | 覆土 | | | | | | | | | | | |

第五章 調査成果のまとめ

今回は約40㎡と狭い範囲での調査となったが、その中でも古墳時代を中心とする濃密な遺構展開を確認することができた。

調査区の南部で検出された竪穴2は、カマドや貼り床硬化面・柱穴の存在から竪穴住居であることは確実である。大部分が調査区外へ続き北西側1/3ほどが検出できたのみであるが、一辺6m前後(以上)という大よその規模は把握できた。覆土中の出土遺物からは、7世紀後葉には廃絶・埋没過程に入っていたであろうことが推察できる。古墳時代後期でも終末段階の遺構といえよう。

その他の竪穴や硬化面、遺物包含層からも同時期の遺物が多く出土しており、本地点周辺に当該期の集落が広がっていたことを窺わせる成果となった。台山遺跡では過去の調査でも古墳後期に属する住居の発見例が多く、丘陵上を中心に広範囲での集落展開を見て取ることができる。一方、本遺跡では古墳時代中期や奈良時代に属する住居の発見例もあり、弥生中期後半から平安時代までの遺構・遺物も多く発見されている。このように、台山遺跡は時間軸という視点から当地域の社会動向を考える上でも貴重な遺跡といえることができる。今のところ点的な調査ばかりでこうした問題を論じるには資料不足の感が否めないが、今回のように小規模な調査でも積み重ねることで、各時期における遺構の空間的広がりや時間的消長が次第に明らかになって行くことだろう。

台山遺跡から北西に続く丘陵地においても、水道山遺跡や天神山城で弥生後期～平安時代の集落や遺物集中といった調査成果が挙がっており、周辺の山崎地区は鎌倉市域でも古墳後期の横穴墓の密集地として知られている。やはり調査・報告例が少ないため今もって遺跡の全体像を語れる段階にはないが、今後の調査も含め、資料の蓄積と公開に立脚した研究の深化が期待される地域であることは疑いない。

※出土した須恵器の年代観については、以下の文献を参考とした。

鈴木敏則 2004 「第5章 第2節 静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』 浜松市教育員会

付編 台山遺跡のテフラ

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

台山遺跡は、鎌倉市台字西ノ台1418番10の市内北部の台地上に位置する。発掘調査では、テフラと思われる堆積物が検出された。ここでは、この試料について湿式篩分けを行い、重鉱物および軽鉱物組成を調べた。

2. 試料と方法

分析試料は、台山遺跡の発掘調査で採取された試料1点である(表1、図版1-1)。この試料は、古墳時代末の竪穴住居とピットを検出した後、旧石器時代の遺跡と堆積層序確認を行うために、地表より約2m掘り下げた土層から採取した試料である。

表1 分析試料とその特徴

| 分析No. | 試料 | 試料の特徴 |
|-------|----|---|
| 1 | ③ | 暗褐色(10YR 3/3)シルト質粘土、明黄褐色(10YR 6/6)粒子(~3mm)混じる |

試料は、以下の方法で処理した。

自然湿潤状態22.25g程度を秤量した後、1φ(0.5mm)、2φ(0.25mm)、3φ(0.125mm)、4φ(0.0063mm)の4枚の篩を重ね、流水下で湿式ふるい分けを行った。それらを乾燥後、4φ篩残渣につて、重液(テトラブロモエタン、比重2.96)を用いて重鉱物と軽鉱物に分離した。重鉱物および軽鉱物は、プレパラートを作製した後、偏光顕微鏡下で鉱物粒子を同定、計数し、鉱物組成を求めた。

重鉱物は、斜方輝石(Opx)、単斜輝石(Cpx)、角閃石(Ho)、磁鉄鉱(Mag)、不明(Opq)に分類・計数した。また、軽鉱物は、石英(Qu)、長石(Pl)、火山ガラス(形態別)、不明(Opq)に分類・計数した。火山ガラスの形態は、町田・新井(2003)の分類基準に従った。

なお、含水率を求めるために、10g程度を蒸発皿に採取し、恒温乾燥機110°C、24時間乾燥した。

3. 結果と考察

以下に、各試料の湿式篩分け結果、軽鉱物組成および重鉱物組成の結果を示す。

[分析No.1(試料③)]

試料は、含水率(%)が60.09%であった。湿式篩分けした結果、1φ篩残渣が最も多かった(表2)。

1φ篩残渣の実体顕微鏡観察では、褐鉄鉱のパイプ状(高師小僧)とその破片のみであった。2φ篩残渣の実体顕微鏡では、褐色の褐鉄鉱や磁鉄鉱、やや発泡した黒灰色火山岩片、白色岩片、長石類、輝石類などの鉱物群が含まれていた(図版1-2)。

表2 試料の湿式篩分け・重液分離の結果

| 分析No. | 含水率 % | 処理乾燥 重量(g) | 砂粒分の粒度組成(重量g) | | | | 重液分離(g) | |
|-------|----------|---------------|---------------|--------|--------|--------|---------|--------|
| | | | 1φ | 2φ | 3φ | 4φ | 軽鉱物 | 重鉱物 |
| 1 | 60.09 | 13.37 | 0.0444 | 0.0066 | 0.0123 | 0.0120 | 0.0064 | 0.0083 |

軽鉱物 (4 φ) の偏光顕微鏡観察では、長石 (Pl) が最も多く、次いで石英 (Qu) も多い。火山ガラスは、急冷破碎型フレーク状ガラス (c1) が1個体検出された (表3)。なお、骨針化石も含まれていた (図版1-10)。

重鉱物 (4 φ) の偏光顕微鏡観察では、斜方輝石 (Opx) が最も多く、カンラン石 (Ol) や単斜輝石 (Cpx) あるいは角閃石 (Ho) も含まれていた (表3)。なお、スコリア粒子と考えられる黒色斑晶質岩片は、不明粒子 (Opq) の19個体中の2個体であった (図版1-9)。

以上の結果から、この試料は、火山ガラスやスコリアが含まれないことから、テフラの可能性は低いと考えられる。

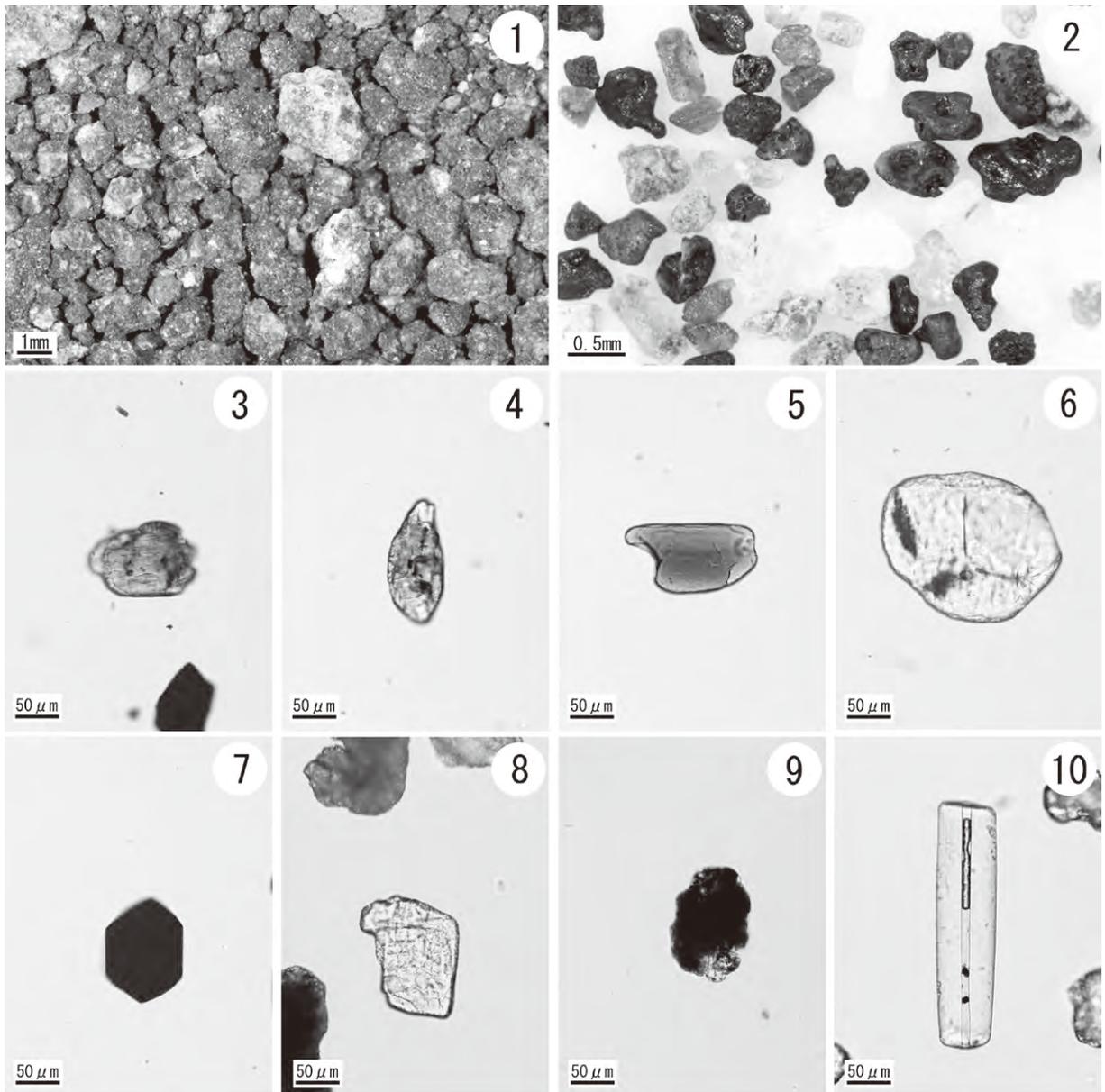
表3 4 φ 篩残渣中の鉱物組成

| 分類群 分析No. | 石英 (Qu) | 長石 (Pl) | 不明 (Opq) | 軽鉱物 (個数) | | | | | |
|--------------|------------|------------|-------------|-------------|-------------|-------------|---------------|---------------|------------|
| | | | | バブル (泡) 型 | | 軽石型 | | 急冷破碎型 | |
| | | | | 平板状 (b1) | Y字状 (b2) | 繊維状 (p1) | スポンジ状 (p2) | フレーク状 (c1) | 塊状 (c2) |
| 1 | 38 | 74 | 95 | | | | | 1 | |

| 分類群 分析No. | ガラス 合計 | 軽鉱物 の合計 | 重鉱物 (個数) | | | | | | 重鉱物 の合計 |
|--------------|-----------|------------|---------------|---------------|-------------|---------------|-------------|-------------|------------|
| | | | 斜方輝石 (Opx) | 単斜輝石 (Cpx) | 角閃石 (Ho) | カンラン石 (Ho) | 磁鉄鉱 (Mg) | 不明 (Opq) | |
| 1 | 1 | 208 | 62 | 8 | 7 | 11 | 121 | 19 | 228 |

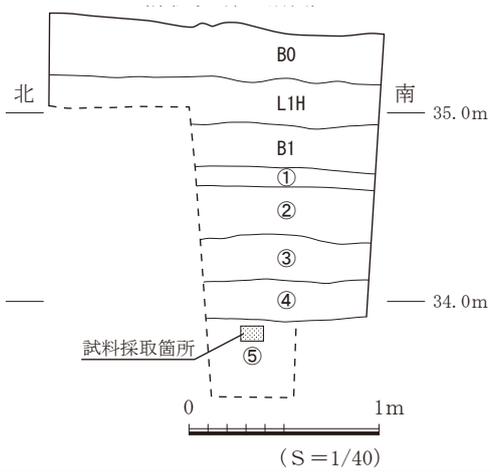
引用文献

町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス. 336p, 東京大学出版会.



図版1 分析試料と鉱物の偏光顕微鏡写真

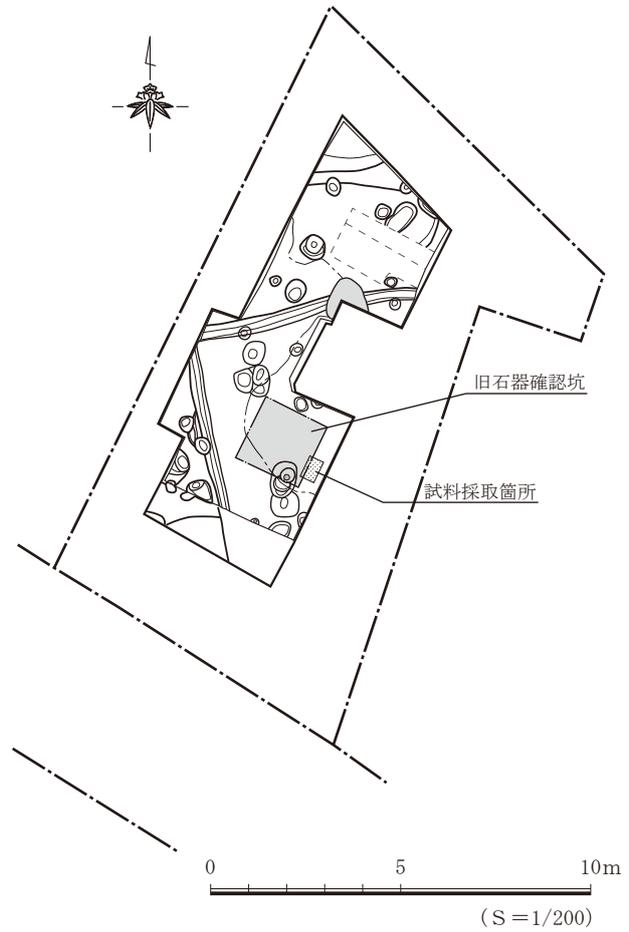
1. 分析した試料 2. 2φ篩残渣の実体顕微鏡写真 3. 斜方輝石 (Opx)
 4. 単斜輝石 (Cpx) 5. 角閃石 (Ho) 6. カンラン石 (Ol) 7. 磁鉄鉱 (Mag)
 8. 長石 (Pl) 9. スコリア粒子 10. 骨針化石



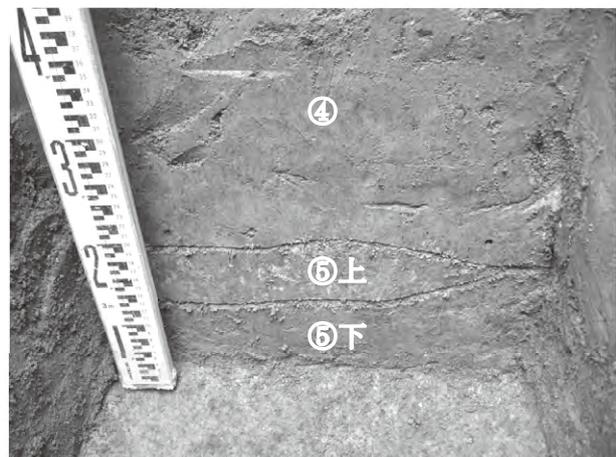
- ① 黄褐色土 上層よりやや明るい。粒径5mmの黒色スコリア多い。
- ② 黄褐色土 上位がやや明るい。粒径1~3mmの黒色スコリア多い。
- ③ 暗黄褐色土 ①や②の上位に比べて暗い(ように見える)。
粒径1mmの黒色スコリア微量。
- ④ 暗黄褐色土 ③より暗い。粒径3mmの黒色スコリア微量。
- ⑤ 暗灰色土 軟質(ボソボソ)。粒径10mm大の白色軟化粒子多い。



確認坑完掘状況 (西から)



土層断面 (西から)



下部土層断面 (南から)

図1 試料採取箇所



1. 調査開始前 (南から)



5. I区 竪穴2 竈セクション (東から)



2. I区 表土掘削状況 (北から)



6. I区 遺構外 遺物出土状況 (図6-35)



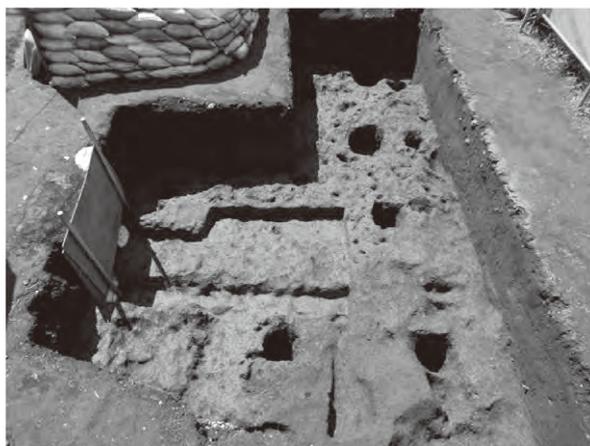
3. I区 竪穴2 (北から)



7. I区 遺構外 遺物出土状況 (図6-36)



4. I区 竪穴2 竈 (北から)



8. I区 最終全景 (北西から)

図版2



1. II区 竪穴2 遺物出土状況 (南西から)



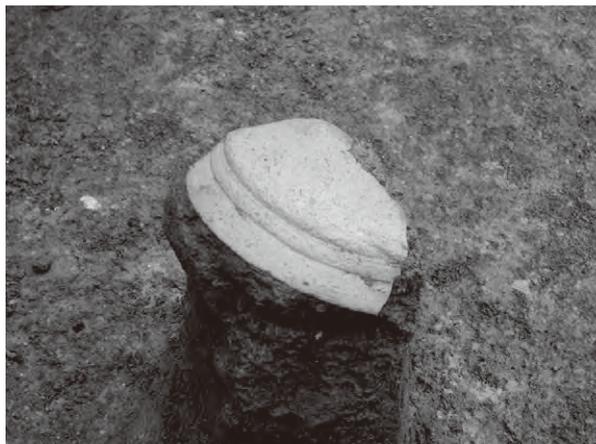
5. II区 竪穴2 掘り方 (北から)



2. 同上 アップ (図6-16)



6. II区 竪穴3 掘り方 (東から)



3. 同上 アップ (図6-2)



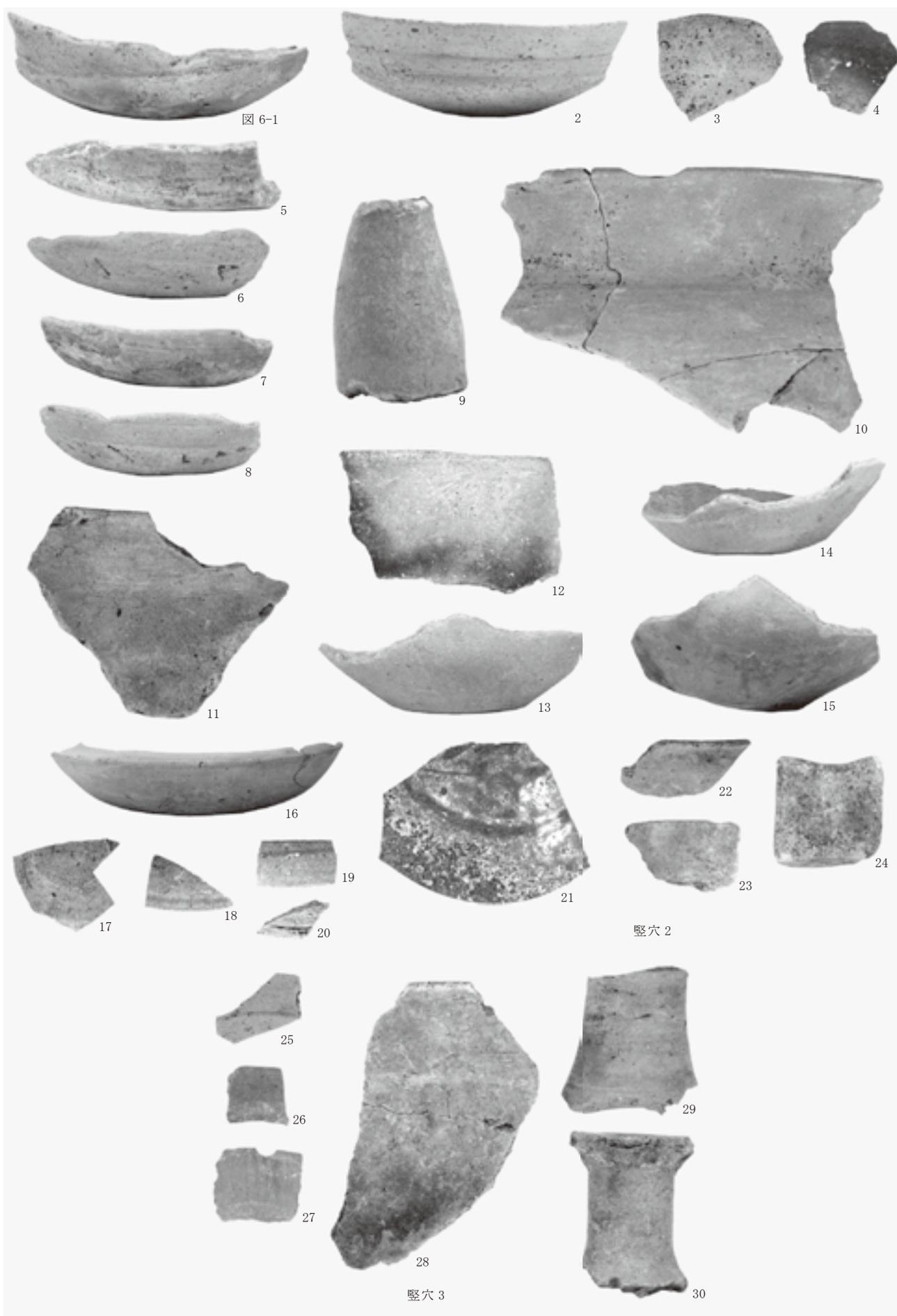
7. II区 ローム層確認坑 (西から)



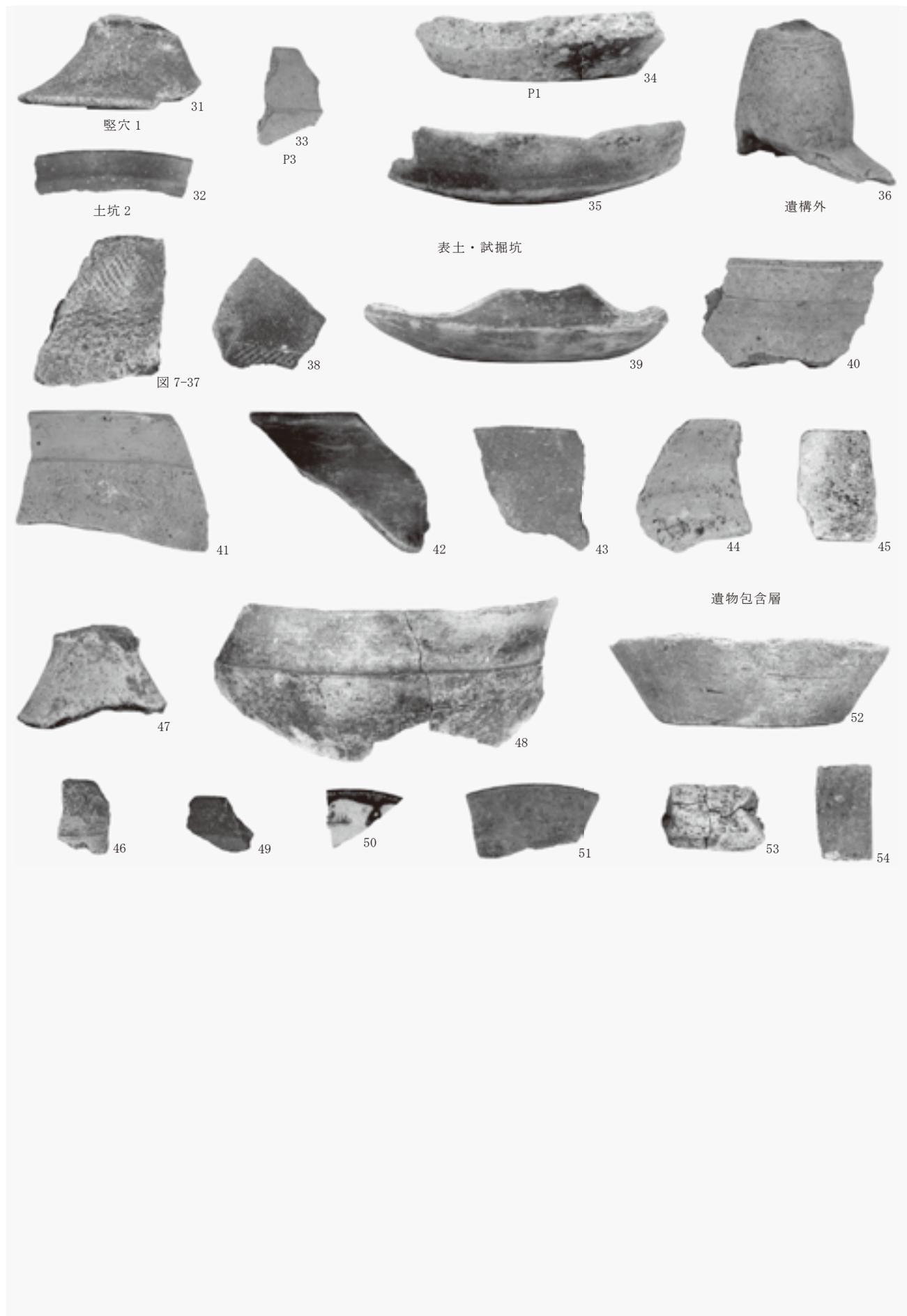
4. II区 竪穴2 (北から)



8. II区 ローム層確認坑 最下層付近アップ (南から)



图版 4



報告書抄録

| | | | | | | | | |
|--------------------------------|-------------------------------|-------|------|-------------------|--------------------|---------------------------|-------------|-------------------------|
| ふりがな | かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちようさほうこくしょ | | | | | | | |
| 書名 | 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 | | | | | | | |
| 副書名 | 平成27年度発掘調査報告 | | | | | | | |
| 巻次 | 32 (第2分冊) | | | | | | | |
| シリーズ名 | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | | | | | | | | |
| 編著者 | 沖元 道/沖元 道・馬淵和雄/押木弘己/押木弘己 | | | | | | | |
| 編集機関 | 鎌倉市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2016年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 (㎡) | 調査原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群 | 神奈川県鎌倉市 小町二丁目 24番14 | 14204 | 242 | 35° 19' 17" | 139° 33' 05" | 20070828 ～ 20070926 | 14.50 | 個人専用 住宅 (杭基礎) |
| おおくらばくふしゅうへんいせきぐん 大倉幕府周辺遺跡群 | 神奈川県鎌倉市 雪ノ下字天神前 562番30 | 14204 | 49 | 35° 19' 24" | 139° 33' 46" | 20071107 ～ 20071214 | 26.25 | 個人専用 住宅 (地盤の表層改良) |
| わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群 | 神奈川県鎌倉市 大町一丁目 1034番9 | 14204 | 242 | 35° 18' 57" | 139° 33' 05" | 20100818 ～ 20101105 | 79.81 | 個人専用 住宅 (地盤の柱状改良) |
| だいやまいせき 台山遺跡 | 神奈川県鎌倉市 台字西ノ台 1418番10 | 14204 | 29 | 35° 20' 19" | 139° 33' 23" | 20140828 ～ 20141010 | 40.40 | 個人専用 住宅 (杭基礎) |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|--------------------------------|-----|------|-----------------------------|--------------------------------------|--|
| わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群 | 都市 | 中世 | 溝、板列、土坑、 ピット | かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、木製品、 金属製品、石製品 | 13世紀前葉から14世 紀の生活面。土坑から 寄生虫卵を検出。 |
| おおくらばくふしゅうへんいせきぐん 大倉幕府周辺遺跡群 | 都市 | 中世 | 溝、土塁状遺構、 道路跡、土坑、 ピット | かわらけ、国産陶器、 舶載陶磁器、木製品、 金属製品、石製品 | 13世紀前半～15世紀 の遺構を検出。道路や 溝の軸方位で土地利用 の変遷を確認。 |
| わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群 | 都市 | 中世 | 竪穴建物、道路、 井戸、土坑、ピッ ト | 土器、陶磁器、金属製 品、石製品 | 南北方向の道路を検出。 13世紀中頃～14世紀 代で4段階の造り替え を確認。 |
| だいやまいせき 台山遺跡 | 集落跡 | 古墳時代 | 竪穴住居、硬化 面、土坑、ピット、 地割れ | 土師器、須恵器、石製 品、弥生土器 | ローム層を掘り込む竪 穴住居を確認。カマド を備え、7世紀後葉に 廃絶。 |

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 32

平成 27 年度発掘調査報告

(第 2 分冊)

発行日 平成 28 年 3 月 31 日

編集・発行 鎌倉市教育委員会

印刷 芝浦エンジニアリング株式会社

